令和４年度　心理臨床相談センター活動報告
（令和４年４月～令和５年３月）

中山　晶衣　お茶の水女子大学大学院　人間文化創成科学研究科
岡　歩美　お茶の水女子大学大学院　人間文化創成科学研究科
加藤　碧子　お茶の水女子大学大学院　人間文化創成科学研究科
髙橋　あゆみ　お茶の水女子大学大学院　人間文化創成科学研究科
富岡　愛夕海　お茶の水女子大学大学院　人間文化創成科学研究科
宮山　未来乃　お茶の水女子大学大学院　人間文化創成科学研究科

Ⅰ　はじめに

お茶の水女子大学心理臨床相談センター（以下，相談センター）は，主に発達臨床心理学コースの教員と大学院生によって運営されている。本稿では，令和４年度の相談センターの活動実績を簡単に紹介し，今後の展望について述べる。

（岡歩美）

Ⅱ　相談センター概要

1. 設備

相談センターは，大学本館の２階と１階に位置する。２階には，受付とカルテや備品などを収めた準備室に加え，個人面接室が２つ，プレイルームと家族面接室がそれぞれ１つある。個人面接室は，背の高いテーブルとイスが設置されている部屋と，背の低いテーブルとソファーが設置されている部屋があり，来談するクライエントや用途に合わせて使い分けられている。プレイルームには，おもちゃが豊富に置かれており，箱庭やドールハウス，プラレールなどを用いた見立て遊びなどの繊細な遊びから，バランスボールや大きな積木などを用いた身体を使う遊びまで行うことができる。プレイルームと家族面接室は，内扉で繋がっており，必要に応じて行き来することができるようになっている。

１階には，プレイルームと家族面接室が１つずつある。１階のプレイルームには，ボールプールがあり，２階のプレイルームよりも大きな遊びが展開されやすい。

（岡歩美）

2. スタッフ

相談センターのスタッフは，センター員（教員と教務補佐員，アカデミック・アシスタント(AA)），相談員（大学院発達臨床心理学コース博士前期課程と博士後期課程の学生）から成る（Table1）。相談員の数は，前年度と比べて，10名ほど減少した。

Table1　令和４年度相談センター構成員内訳

	人数
博士前期課程院生	31
博士後期課程院生	5
教員	5
心理相談補佐員	2
AA	1
合計	44

Note. Table1内の数値は令和５年２月以前のものである。

新たに申し込みのあったケースは，センター員と相談員でインテークを行い，定期的にセンター員からの臨床指導を受けながら，相談員が中心となってケースを担当している。また，後述するコース全体のカンファレンスにおいても，ケース検討が重ねられている。

（岡歩美）

Ⅲ　運営

1. 運営委員会

相談センター管理運営に関する重要事項は，お茶の水女子大学大学院人間文化創成科学研究科附属心理臨床相談センター運営委員会において審議される。その決定事項に基づき，センター員および相談員は，相談活動に加えて，研究および他の機関との連携を図る。

（富岡愛夕海）

2. 相談員による運営

相談センターは，センター員と相談員の代表である学生代表と各係の協議・連携に従って運営されている。学生代表は，博士後期課程の学生が務め，各期のオリエンテーションや振り返りの会の司会，各係のとりまとめなどを行う。係は，カンファレンスの運営を行うカンファ係，相談室の整備を担当する相談室係，カルテの管理を担当するカルテ係，相談センター紀要の発行を担当する紀要係の４つに分けられ，主に博士前期課程の学生を中心に活動している。

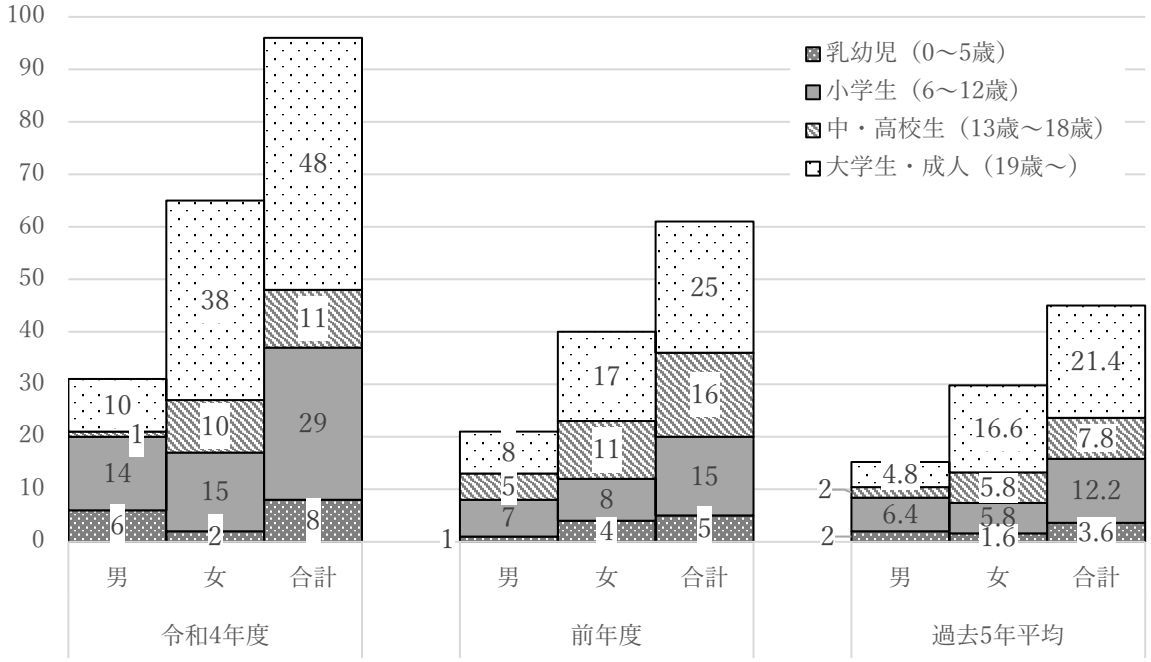
（富岡愛夕海）

Ⅳ　相談活動

1. 面接形態

相談センターでの面接形態は，インテークを行う受理面接，個人面接や遊戯面接が含まれる臨床心理面接，並行親面接，知能検査などを行う検査面接，家族・グループ面接，コンサルテーションに分けられる。さらに，検査結果などのフィードバックの際には，報告書を作成し，面接に加えて文書料を計上する。令和元年度までの面接は，ク

Figure1　令和 4 年度，前年度，過去 5 年平均の新規受理件数



ライエントが相談センターに来談し，セラピストと対面する形式でのみ行われていたが，新型コロナウイルスの感染拡大に際し，令和 2 年度より Zoom を用いたオンライン面接も行われるようになった。オンライン面接については，後ほど詳しく述べる。

（髙橋あゆみ・中山晶衣）

2. 新規受理件数

令和 4 年度の新規受理件数は 96 件であった（Figure1，Table2）。

令和 4 年度の新規受理件数は，令和 3 年度（61 件）と比較し，大きく増加している。新型コロナウイルスの感染拡大も落ち着き始めた夏頃には新規の申込が急増し，約 1 ヶ月の間，新規申込の受付を停止することを余儀なくされたが，受付再開後も新規の申込は定期的に続いた。来談経路としては，HP 経由が 60 件と最多であり，続いて他機関からの紹介が 25 件，知人からの紹介が 6 件であった（Figure2）。令和 3 年度は HP 経由での来談が 21 件であり，約 3 割のクライエントが HP を見て来談していた。令和 4 年度は，約 6 割のクライエントが HP を見て来談しており，HP 経由での来談が大幅に増加している。

年齢段階や性別の傾向でみると，令和 3 年度と比べて大きな変化は見られないが，大学生・成人（19 歳～）の女性来談者が多くなっている（Figure1, Table2）。

Table 2　令和 4 年度新規受理分年齢・男女別内訳

	男	女	合計
乳幼児(0～5歳)	6	2	8
小学生(6～12歳)	14	15	29
中・高校生(13～18歳)	1	10	11
大学生・成人(19歳～)	10	38	48
合計	31	67	96

相談センターでは，令和 2 年度より従来の電話による申込に加え，メールでの申込を開始した。令和 4 年度新規受理分の申込方法をみると，電話申込が 43 件，メール申込が 53 件であった。令和 4 年度は前年度と異なり，メールでの申込数が電話での申込数を上回っていた。受付時間の限られている電話申込よりも，受付時間に制限のないメール申込を希望される方が増加していると考えられる（Figure3）。

（髙橋あゆみ・中山晶衣）

Figure2　令和 4 年度新規受理件数来談経路

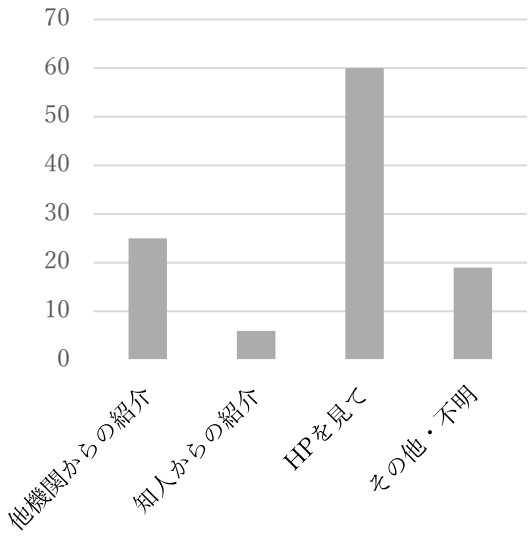
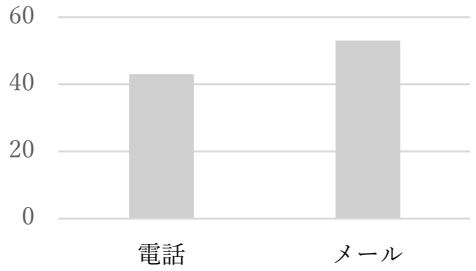


Figure3　令和 4 年度新規受理分申込方法



3. 相談件数

次に，相談件数について述べる。延べ件数は

1313 件で，新型コロナウイルス感染拡大の影響を受けた令和 3 年度以前から大きく増加し，過去 5 年平均を上回る件数となった（Table3，Figure4）。

Table3　**令和 4 年度相談件数**

	件数	延べ件数
受理面接	96	96 （オンライン8）
並行親面接	36	170 （オンライン7）
臨床心理面接	111	978 （オンライン286）
検査面接	29	39 （オンライン1）
家族・グループ面接	9	9 （オンライン0）
文書料	21	21
コンサルテーション	0	0 （オンライン0）
合計	302	1313

新規受理件数において年齢段階や性別の傾向に大きな変化は見られないが，19 歳以上の女性の新規申し込み件数が，令和 3 年度の倍近くになっている（令和 3 年度は 17 件，令和 4 年度は 38 件）。この変化の理由の一つとして，本センターは女子大学の付属であり，相談員のほとんどが女性であることが考えられる。来年度以降のデータも収集することで，本センターの特徴がより明らかになっていくだろう。

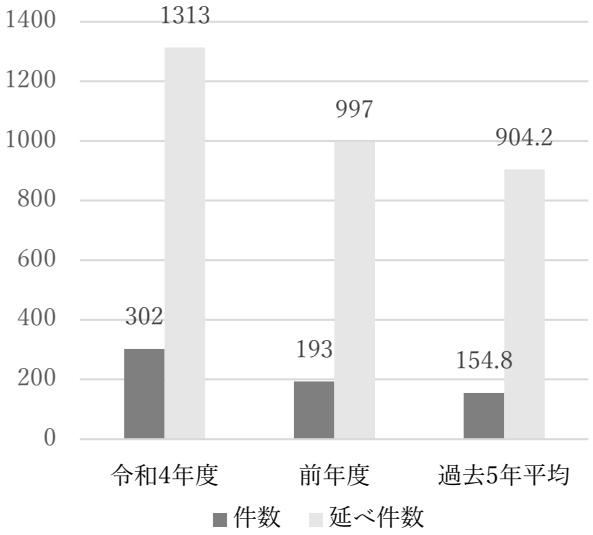
また，令和 4 年度の特徴として，検査面接と家族・グループ面接の実施数の増加が挙げられる（Table3）。令和 3 年度は，検査面接が 19 件，家族・グループ面接が 3 件であった。

オンライン面接は，全体で 302 件となっており，延べ件数全体の約 23%を占める。オンライン面接が開始された令和 2 年度（延べ件数全体の約 41%）や，令和 3 年度（延べ件数全体の約 45%）と比べると，令和 4 年度のオンライン面接実施割合は，20%ほど減少している。これは，新型コロナウイルスの感染状況が落ち着き，対面での面接を希望するクライエントが増加してきたことが関連しているのではないかと考えられる。

また，令和 4 年度では，受理面接からオンライン面接で実施されているケースが約 8%ある。割合は決して多いとは言えないが，初期の相談からオンライン実施を希望するクライエントが一定数おり，そのニーズに対応できていると考えられる。

（髙橋あゆみ・中山晶衣）

Figure4　**令和 4 年度，前年度，過去 5 年平均の相談件数**



4. 相談内容

令和 4 年度の年齢ごとの相談内容について，Table4 に示す。

6～12 歳，13～18 歳では学校関係の悩みが多く，19 歳以上では性格や対人関係の悩みが多くなる傾向にあることがわかる。相談内容については，令和 3 年度や過去 5 年のデータから大きな変化は見られなかった。

Table4　令和４年度内容内訳

	学校・教育関係	発達の遅れ・偏り	性格・行動関係	対人関係	子育てについて	その他	合計
0～5歳	1	5	2	0	0	1	9
6～12歳	21	10	5	2	3	0	41
13～18歳	13	0	3	1	0	0	17
19歳以上	6	5	35	17	2	10	75
合計	41	20	45	20	5	11	142

Ⅴ　ケースカンファレンス

センターでは，原則として，毎週水曜日の午後にケースカンファレンスを開催している。カンファレンスは全員で行う「全体会」と，15名程度で行う「分科会」に分けられる。特に「分科会」は，令和３年度以前は２つのグループで実施していたが，令和３年度後期より３グループに分け実施することとした。これは，博士前期課程の学生の増加に伴い，カンファレンス参加者が増加したことや，少人数での意見交換の方が多くの学生が発言しやすいため，より少人数での実施が望ましいのではないかという意見があげられたためである。これらのカンファレンスを通じ，相談員は活発な意見交換を行い，ケースへの理解を深めている。

さらに，毎年７月と１月には振り返りの会を開き，センター運営の手順の確認と情報管理の徹底，受理ケースと処遇についての報告を行っている。

（宮山未来乃）

Ⅵ　令和４年度の活動

令和４年度より開始した新たな活動として，次の２つがあげられる。

1. 引継ぎカンファレンス

引継ぎとは，担当者の修了等に伴って生じて担当者交代が必要な場合，現ケース担当者が次の担当者にケースの概要や経緯を伝えることを指す。クライエントにとっては担当者交代を指す出来事であり，心理相談の重要な局面であるため，丁寧に実施していく必要がある。具体的には，引継ぎにあたり，クライエントの面接継続の意向確認，次ケース担当者の紹介に加え，クライエントと現担当者との別れや，担当者が変わることへのクライエントの不安を話し合うことなどが行われる。引継ぎカンファは，こうした過程の理解を相談員が深めることを目的に，教員が提案し，令和４年度末に新たに実施した，教員・相談員の原則全員参加のカンファレンスである。そこでは，実際にどのような過程で引き継いだか事例毎に発表していき，学びを深めていった。初めての試みであったが，相談が今年度も継続実施の予定である。

（宮山未来乃）

2. カルテの整理・廃棄

令和４年度より，カルテ係担当教員からの提案により，相談室のカルテ等文書廃棄手続きの整備と保管期限切れ文書の廃棄を厳格化することとした。相談センターの文書管理は大学法人文書管理規則・文書管理簿の別表において登録されているが，保管期限前の文書と保管期限が既に到来した文書の混在が認められたため手続の標準化を行ったものである。

まず，文書の保管期間について，文書管理規則の保管期限の見直しを行い，令和５年度から診療録と同様にカルテ等のセンター文書の保管期間を10年から５年とした。さらに，各ケース担当者による中断・終結時の文書取扱いの手順を明示し，カルテ係においても年度毎の文書廃棄手続きを整備した。

（加藤碧子）

Ⅶ　まとめと今後の展望

以上, 令和 4 年度の相談センターの相談実績や, 活動について振り返った。令和 4 年度は，令和 2 年度や令和 3 年度と比較すると，相談件数が 3 割程度増加していた。そのため，相談員が多くのケースに触れながら，臨床経験を重ね，貴重な学びを得ることができていると考えられる。また，引継ぎカンファレンスの実施やカルテの整理・廃棄など，新たな取り組みも開始され，相談員によるより主体的なセンターの運営が行われていることがうかがえる。令和 4 年度の相談員の数は減少しているものの，ケース実施件数（相談実施件数）は大幅に増加していることから，相談員ひとりひとりがより多くのケースを担当することができ，学びの機会が以前にも増して充実してきていると考えられる。相談員の数が限られている中でも，このように多くの相談を受けることができたのは, 学生が教員や心理相談補佐員の方々と十分に連携しながら，安全な枠の中でケースを担当しているからだと考えられる。

また，令和 4 年度は検査と家族・グループ面接の数が昨年度と比べて増加していたことが特徴的であった。本相談センターは多様な悩みを持つクライエントにとっての相談機関として機能しており，そうした多様なケースを担当できることはケースを担当する学生にとって充実した学びになっていると想像される。

さらに，令和 2 年度よりはじまったオンライン面接が，令和 4 年度でも引き続き多くのケースで実施されていることも確認できた。新型コロナウイルスの感染状況は落ち着きつつあるものの，対面での面接と同じように，オンライン面接には一定のニーズがあると考えられることから，オンライン面接の可能性や意義を検討していくことが今後の課題である。

最後に，本活動報告では昨年度の報告に引き続き，ケース数等について客観的に報告する統計資料ではなく，より多くの情報を掲載し，相談員の実際の活動について詳しく報告することを目指した。そうすることで，相談センターの運営や令和 4 年度のケース全体について多角的な視点から考察することができるとともに，学生主体の運営という相談センターの特徴をより明らかにすることができると考えられる。また，活動報告に学生による運営についての記述を含めることで，1 年間の学生運営の記録を残し，次年度以降の運営の一助になるのではないかと考える。来年度以降も，学生運営の記録も含めた活動報告が行われることを期待する。

（中山晶衣）

＜謝辞＞作成にあたりご協力いただきました，AA 小松実知子さん，博士前期課程 2 年橋優実さんに厚く御礼申し上げます 。